



一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133



日本ボリビア協会会報誌

カントウータ

Cantuta No.29

目 次

- |                         |       |
|-------------------------|-------|
| 1. ジェンダーからみるボリビア社会の変化   | 国本 伊代 |
| 2. ボリビアと私たちの出会い         | 太田 昌国 |
| 3. ボリビアのオキナワと、神奈川の沖縄    | 屋良 朝信 |
| 4. じゃがいもの旅の物語 (連載 その20) | 杉田 房子 |

## 1. ジェンダーからみるボリビア社会の変化

中央大学名誉教授

国本 伊代

ジェンダーとは、社会的・文化的につくられた性差を表す用語である。長い人類の歴史の中で形成された性別による社会的役割分担や性差の文化的・社会的価値観は、それぞれの社会の独自性を物語るものである。しかし男女の関係がまったく平等であったという社会や時代は、人類の歴史にはなかったであろう。仮に短期的で少数の例外があったとしても、「産む性」である女性は常に管理される対象であった。管理するのは男性であり、男性を中心とする「男性優位主義社会」は世界のどの地域においても常に支配的であった。

そのような実態に異議を唱えたのが「女性解放運動」である。近現代史に限定すると、まず女性が男性と同等に学ぶ機会を求めて高等教育を受ける権利を主張し、さらに参政権を求めた運動が20世紀前半を通じて現代の先進諸国で活発となった。第2次世界大戦前の日本では、高等教育は高等女子師範学校などを除くとほとんど認められておらず、参政権が認められたのも第2次大戦の敗北後の1945年11月と、今からわずか60年ほど前のことである。

ボリビアを含めたラテンアメリカ諸国のほとんども、日本と同じような女性解放運動の歴史をもっている。1970年代半ばに始まる国連主導の「男女差別撤廃運動」の国際的潮流のなかで、多くの国で差別と抑圧を受け続けてきた女性の解放と男女平等への取り組みが急速に進み、20世紀末から21世紀にかけて女性を取り巻く社会的・政治的環境は大きく変化した。とくに政策決定の場である立法府（議会）への女性の参加が、「ジェンダー・クォータ制」と呼ばれる「議席における女性枠割当制度」を導入することで大幅に拡大した。国連主導に先立って北欧諸国がジェンダー・クォータ制を採用していち早く男女平等の社会をつくる取り組みに挑戦する一方で、世界の圧倒的多数国は1975年に国連主導で開催された「国際女性年」を

出発点としてその取り組みを始めている。ラテンアメリカ地域はこの国連主導の女性の地位改善にもっとも模範的に取り組んできたことで知られているが、とりわけボリビアは世界的にも模範国のひとつとなっている。

そのようなボリビア社会の変化を具体的に紹介しているのが、2015年に出版された『ラテンアメリカ 21世紀の社会と女性』（新評論）の中のボリビア編「ボリビア—激変する体制と女性たち」である。著者である都留文科大学で教鞭をとるボリビア研究者の重富恵子氏によると、1980年代から90年代の経済混乱期を経たのちのボリビアに劇的な変化をもたらした社会主義運動党（MAS）の勢力拡大とそのリーダーとして先住民初の大統領となったエボ・モラレス政権の誕生によって、ボリビアの女性たちが置かれた環境はあらゆる面で大きく変わったという。MAS政権は、経済・雇用・教育・保健・暴力などにおいて女性たちが直面する問題の改善に取り組むと同時に、女性の政治参加と公共政策の領域における女性の活躍の場を大きく広げてきた。2008年に策定された「機会均等国家計画—“善き生”（Vivir Bien）のために女性がつくる新しいボリビア」および2009年に公布された新憲法で、ジェンダーを含めたあらゆる差異に基づく差別は罰則規定付きで禁止された。現実にはどこまで監視の目が届くのか、その実行性に関する検証が必要であるにしても、MAS政権の実行力は高い。国際労働機構（ILO）が2011年に採択した家事労働者に関する条約（ILO条約第189号）を、ボリビアは2013年に批准して国内法を整備し、家事労働者の待遇改善をすすめた世界でも最先端を行くグループのひとつである。その結果、それまで安い賃金で非正規労働を強いられてきた多くの家事労働者に対する社会的認識が変わるとされる。

21世紀のボリビアでは伝統的衣装であるポリェーラ（髷の多いふっくらしたスカート）を身に着けて山高帽を頭にのせた女性たちの国会議席に占める割合は53.1%（2014年12月の選挙）とな

り、女性の政界進出では世界第2位となったが、ボリビアで突如として女性の政界進出が拡大したわけではない。それはジェンダー・クォータ制を取り入れて政党の選挙候補者名簿に女性枠を設け、1997年に30%、2006年に40%、2010年に50%と、女性枠の段階的拡大によって着実に達成されたものでもある。このほぼ20年間に及ぶ地道な努力が、先進国と称する日本の女性の政界でのみじめな状況との差を作り上げたと言っても過言ではない。ちなみに同年の日本の国会議席に占める女性の割合(衆議院)は8.1%で、世界で134位であった。

ボリビアでも国内的には多様な批判があったし、現在でもある。法の規定を順守するためだけの飾り物的女性議員の存在が、ジェンダー・クォータ制への批判ともなった。しかし無能な男性議員や権力への執着のみで私利私欲に走る男性議員の存在などどこにでも見られる実情を考えれば、政界進出の歴史の浅い女性議員のなかに問題だらけの議員が存在してもおかしくはない。要は男女がもつ異なる多様な視点が、政府や地方自治体の政策策定にもっと生かされるべしという基本的な認識こそが重要なのである。

ボリビアの女性たちは労働市場への参加においてもたくましい。労働年齢人口の女性の64%が働いて稼ぐが、日本の女性の働く割合は40%台で低い。貧しいから家計のために働く必要があるとしても、働くボリビアの女性たちのたくましさは社会そのものを変える原動力である。「高度な経済発展を遂げた世界の先進国のひとつである日本」と統計数字のみで単純に比較しても実感が湧かないかもしれないが、女性であることで男性と差別されている実態を数字で示す「ジェンダー・ギャップ」(世界経済フォーラムによる2014年の数字)では、ボリビアの女性の方が日本の女性たちよりもはるかに優位に立っていた。教育および専門職に関するジェンダー・ギャップでは、ボリビアと日本の差はほとんどないが、管理職に占める女性の割合はボリビアの54%に対して、日本の場合わずかに12%であった。高等教育に関わる教員に占

める女性の割合では、ボリビアの29%に対して日本は18%である。日本人の圧倒的多数、特に男性はこのような日本の女性の置かれた国際的格差の現状を何らかの理由をつけて認めないか無視し、先進国日本と開発途上国ボリビアを比較すること自体が無意味であると主張するかもしれない。しかし国際社会ではそのような主張は通らない。

一方、ボリビアにもまだ多くの課題が残っている。その最たるものが伝統的な男性優位の意識を変えることの難しさである。文化として定着しているマチスモ(ラテンアメリカ諸国に共通する男性優位主義)は、男女双方に定着している根強い社会的・心理的無意識のもとでなされる思考と行動のパターンでもあるからだ。これはまた、日本の場合にも当てはまる。日本の場合には、これに加えて働き方の制度的な問題・男性側の保身思考の根強さ・女性側の安易な計算高さなども大きな障害となっている。ボリビアに関心を持つ会員の皆さんに、ぜひ『ラテンアメリカ 21世紀の社会女性』を読んでいただきたい。

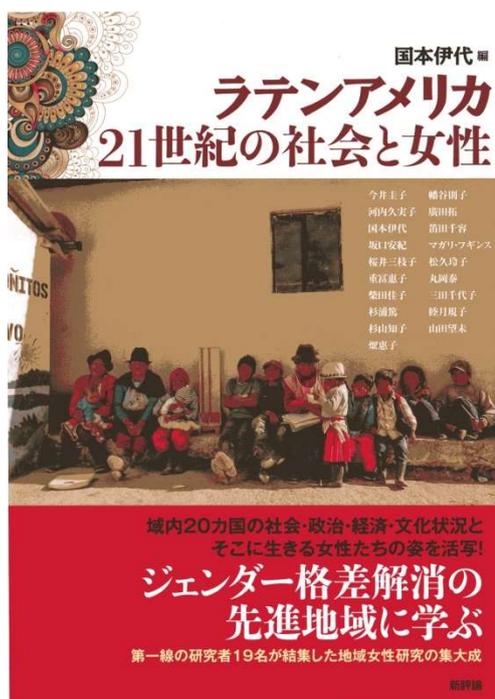


写真1-1 国本 伊代編  
『ラテンアメリカ・21世紀の社会と女性』(2015年)  
ジェンダー格差解消の先進地域に学ぶ 新評論 (表紙)

## 2. ボリビアと私たちの出会い

シネマテーク・インディアス

太田 昌国

1967年、私はまだ大学に在学中で、年長の友人たちと『世界革命運動情報』という雑誌を刊行していた。キューバ革命の展開過程は大きな関心事で、とりわけ1965年以降キューバから姿を消したらしいチェ・ゲバラの消息は気がかりだった。キューバ指導部内部での、革命路線をめぐる理論的角逐が背景にあると思われたからだ。同じころ、ボリビアで反政府ゲリラ闘争の活発化が伝わってきた。キューバから空輸されてくる『グランマ』紙を基に、ボリビア民族解放軍が発表するコミュニケを翻訳し、先に触れた雑誌に掲載した。数ヵ月後の10月9日、ボリビアにおけるチェ・ゲバラの死が伝えられた。やはり、そうだったのか。あの民族解放軍のコミュニケの後ろには、ゲバラの姿があったのか、と思った。(その後翻訳されたゲバラの『ボリビア日記』の巻末には、この解放軍が発した一連のコミュニケも収録されている)。死後一年後の1968年には、ゲバラの論文集『国境を超える革命』を単行本として出版した(レポルト社)。こうして1960年代後半にあつては、私は、アルゼンチン出身のチェ・ゲバラという、ボリビアから見れば「異邦人」の視線を通して、ボリビアに接近を試みていたことになる。

1973年、一年ほどをかけて準備していたラテンアメリカへの旅を、パートナーと共に開始した。各地で人との出会いに恵まれ、仕事にもありついて、旅は長引いていった。旅を始めて2年も経ったころエクアドルの首都キトの街を歩いていた時、一枚の映画ポスターに出会った。先住民の青年が銃を手に、切羽詰まった表情をして立っている。理解できない言葉『YAWAR MALLKU』は映画のタイトルらしいが、そのそばに『コンドルの血』と読み取れるスペイン語が添えられていた。ちょうど、上映当日だった。観に行ったら。ボリビア映画で、登場人物が話すのは、ケチュア語、スペイン語、英語だった。ケチュア語は理解できないが、映像

作品だから、物語はなんとなくは分かる。出発前、日本の新聞で読んだニュースを思い出した。米国の「後進国」援助団体「平和部隊」の医療チームが、アンデス諸国で、人口爆発を防ぐ目的で現地の若い女性に同意を得ないまま不妊手術を施していることが暴露されて、国外追放されたというニュースだ。まさに、それをテーマにした映画だった。内容と映画手法が衝撃的だった。先住民の母語がスクリーン上に炸裂しているということにも、目を開かれた。製作者に会いたいと思って上映会の主催者に尋ねると、エクアドルに政治亡命しているという。

翌日、監督のホルヘ・サンヒネスとプロデューサーのベアトリス・パラシオスが私たちの宿に訪ねてきた。映画の感想、私たちの旅の過程、関心の在りか、ラテンアメリカの歴史の捉え方などをめぐって語り合った。歴史や物事を、似通った視点で見ていることがお互いにわかった。軍事政権下の故国を離れての彼らの亡命生活はなお続き、私たちも南へ向かっての旅が続く。再会を約して別れた後も、二度三度と会う機会に恵まれた。その度に、彼らの旧作や同時代のラテンアメリカの映画作家の作品を見せてもらった。すぐれた映像作家集団であり、とりわけ歴史的な視点がしっかりしていると思った。先住民民族がたどった歴史過程や、彼らに固有の歴史観・自然哲学・人間観を無視するのは当然だというのが世界的に罷り通る「常識」だった時代だが、それを批判し克服することの重要性で一致したことは、もっとも大切なことだった。「ウカマウ」という集団を形成し、集団制作を志していることも興味深かった。

メキシコで別れるとき、一本の16ミリフィルムを預かった。『第一の敵』——1974年、監督らがペルーに亡命していた時にペルー・アンデスで撮影した作品だ。地主の暴虐支配に苦しむ先住民農民と、都会から来た反帝国主義のゲリラが出会い、共同闘争を組み、やがて敗北していく過程を描いたその作品は、明らかに、ボリビアにおけるチェ・ゲバラらの闘いと敗北を彷彿させるものだった。

この作品を日本で公開する可能性を探ること一互いの約束はそれだけだった。1976年のことである。

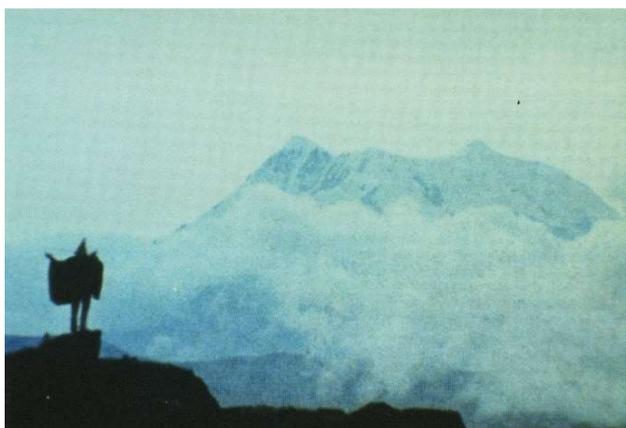


写真 2-1 アンデスに生きる  
ウカマウ映画『地下の民』(1985年)より

帰国後の生活に追われて、彼らとの約束を果たすという意味では、しばらくは無為の時間が過ぎた。だが、「約束」は頭を離れず、機会は探っていた。配給会社の知人にも相談したが、映画の内容からいって商業公開の可能性はゼロだと知った。多様な映画に目を配るミニシアターはまだ多くはなく、第3世界の映画が公開される機会はほとんどない時代だった。自主上映しかない、と心は決まった。自分たちで字幕翻訳をした。送られてきた字幕原稿はスペイン語だが、先住民の農民が語る箇所はスクリーンではケチュア語が響き渡っている。それをシンクロさせることは、容易なことではなかった——など、上映準備の「苦労話」は尽きることはない。だが、その苦労は十分に報われた。1980年6月、2週連続の週末4日間を使っての上映会に詰めかけた人びとの数は2千人。チェ・ゲバラの死から、まだ13年。彼が死んだボリビアから届けられた映画は、あたかも彼らの闘いを描くかのよう——という情宣の方法が、大きな関心を呼んだようだった。上映収入もそれなりの額になり、彼らに送った。

これで弾みがついた。旧作を順次輸入することにした。短編の『革命』(1962年作)と『落盤』(64年作)、長編の『ウカマウ』(66年作)、『コンドルの血』(69年作)、『人民の勇気』(71年作)、『ここから出ていけ!』(76年作)、『ただひとつの拳の

ごとく』(83年作)——全作品を5年ほどかけて輸入し、公開した。彼らの映画理論書を翻訳して



写真 2-2 伝統の踊りを踊る  
ウカマウ映画『地下の民』(1985年)より。

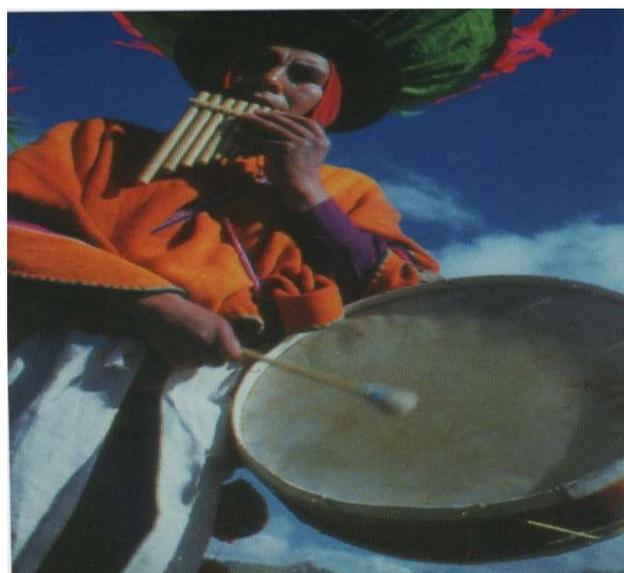


写真 2-3 伝統の音楽を奏でる。  
ウカマウ映画『鳥の歌』(1995年)より。

『革命映画の創造——ラテンアメリカ人民と共に』として出版した(三一書房、1982年)。シナリオ集も2分冊で出版した(インパクト出版会、1981年/1985年)。前記『人民の勇気』は、チェ・ゲバラらのゲリラ闘争に連帯しようとして事前弾圧を受けたボリビアの鉱山労働者や都市の学生たちの動きを、生存者にインタビューしながら再構成したセミ・ドキュメンタリー作品だ。そこには、鉱山主婦会のリーダー、ドミティーラが出演して

いる。彼女は、1975年メキシコで開かれた「国際女性年」会議で、先進国フェミニストや官製の代表団に向けて放った火を噴くような演説で、世界的にも注目を集めたひとだ。彼女が、ボリビアという「くに」(彼女が語るボリビアは、漢字で「国」と書くのはふさわしくない、もっと柔らかな存在に思える)と、自分の半生を語った『私にも話させて』は、アンデスに生きる庶民の女性の生をありのままに語って力強い。これも翻訳・出版した。

こうして、ボリビアとの付き合いが深まった5年ほどの過程を振り返りながら、私は思った——当初はチェ・ゲバラという媒介を通して外在的に見ていたボリビアが、ぐっと身近になった。映画集団ウカマウは、先にも触れたように、先住民族に視点を据えて歴史と現実の読み替えを試みているだけに、それだけアンデスの捉え方も内在的なものになる。そんな手応えを感じ始めたころ、ウカマウから、次回作を共同制作しないかという提案があった。1985年のことである。準備していたのは『地下の民』と題する作品だった。あらすじやシナリオが送られてくる。一人の先住民族の男性の人生を軸に、民族的アイデンティティの死と再生の物語だ。アンデスの神話的な世界も取り入れられていて、興味深い。力不足ではあるが、共同制作に加わることにした。シナリオへの意見を出したり、制作資金をカンパで集めたりした。89年に完成したこの映画は、同年のサンセバスチャン国際映画祭でグランプリを得た。

1980年、一本のボリビア映画の自主上映から始まった私たちの活動は37年の歴史を刻んだ。ウカマウ映画の自主上映・共同制作は今も続けている。日本では、その全作品を観ることができる。ボリビアに関わる書籍もかなり出版できた。この先、ボリビアとの関係でさらにどんなことができるだろうと考える日々である。

### 3. ボリビアのオキナワと、神奈川の沖縄

神奈川在住沖縄二世

屋良 朝信

沖縄県人が神奈川県に多く移り住むようになって約100年の時が経とうとしている。

様々な記録に依れば1889年(明治22年)に沖縄から横浜市へ6人の入寄留者があり、沖縄県人の神奈川県への最初の移住はこの頃かと思われる。一方、沖縄から海外への移住がスタートするのは1899年(明治32)で、遡ることその10年前のことになる。

大正期に紡績業が盛んなころに、多くの働き手が沖縄から神奈川県に集まるようになり、さらに戦前・戦後の臨海工業地帯の発展に伴い、その流入人口も飛躍的に伸びた。

経済的にも困難を極めた時代に、時には差別的な扱いを受けた沖縄県人は、「結」の精神で互いの生活を支えつつ、沖縄文化・芸能を育み現在まで歴史を積み重ねてきた。

神奈川県川崎は1924年(大正13年)に市制がスタートし、川崎沖縄県人会も同年に結成された。2014年に90周年を迎え、24年の100周年まで今年からあと7年である。沖縄と川崎の繋がりとと言えば、那覇市壺屋の陶工との親交を通して作風を築いた人間・国宝の濱田庄司氏や、二度、沖縄を訪ねて各地の文化に触れた岡本太郎氏は、共に川崎市に出身で沖縄との関係も深い。川崎市の隣の横浜市鶴見地区にも沖縄県人会があり、催しなどではそれぞれの芸能団体が互いに往来し一心同体というべき関係にあり、ともに沖縄伝統芸能が盛んなエリアでもある。

私自身は沖縄人・ウチナーンチュ二世として川崎に生まれ、沖縄カルチャーの濃厚な地域で琉球芸能が身近にある環境に育った。この2-3年、あくまでも個人的な思いからではあるが、早い機会に何か形に残しておきたいと思い立ち、川崎・横浜鶴見地区で沖縄にゆかりのある人々に焦点をあてた出版を計画している。

そのため、三線演奏家や舞踊団体のほか、ごく

普通の住民の方々も含めて取材を続けるなかで、あらためてこのエリアには、南米から移り住んでいる沖縄系二世三世の方が多くいることを知った。この沖縄タウンには、南米に移住したウチナーンチュの末裔たちが移り住み、言語環境的にも日本語とともに、ポルトガル語・スペイン語、そして沖縄方言までが飛び交う多文化・多言語コミュニティーとなっている。そんなこともあってこのところブラジル、ペルー、ボリビアから移住して来られた方の取材も続けている。そして取敢えず本の仮題を『海を渡って——ウチナーンチュ 100 年の歩み』と名付けた写真エッセー集を考えている。

ちなみに私の父も若いころにペルーに渡り、リマで 10 年ほど移民として過ごしたのち、終戦前に川崎に帰国していた。終戦前後の混乱期で沖縄に戻ることも叶わず、そのまま川崎に定住したと思われるが、私自身も元を辿れば南米から川崎・横浜鶴見に移り住んだ系譜のなかの一人といえる。

ボリビア東部に位置し、今やボリビア第一の人口を持つ大都市サンタクルスから北東へ 100km ほどのところに、コロニア・オキナワと呼ばれる町があることを、ここから川崎・横浜鶴見へ移住してきた日系三世の方への取材で知った。行政上の自治体として、オキナワの名称を持つ町が日本以外にボリビアにも存在することを知ったのは新鮮な驚きだった。興味深いのは戦後、南米への日系移民に新たな展開があったことだ。それが琉球政府主導によるボリビアへの計画移民ということもその時知った。焦土と化していた沖縄の惨状と困窮ぶりに心を痛めた戦前移住の沖縄県人たちが、1948 年 8 月に首都ラパス沖縄県人会による「ラパス市沖縄救援会」を、また、東部ベニ州のリベラルタ市では「リベラルタ市沖縄戦災救援会」を発足させ救援に乗り出した。1954 年 6 月に、第一次移民団 269 名がチネサダ号にて那覇港を出港、同年 8 月ボリビア・パイロン到着し、戦後ボリビアへの移民の端緒となった。もろもろの事情によって移住者はその後、移転を繰り返し、1957 年にやっと現在のオキナワ移住地(コロニア・オキナワ)

に至る。この間の移住者たちのご苦労がいかにばかりであったかは『ボリビア・コロニア沖縄入植 25 周年史』・『同 50 年史』や、『もう一つのおきなわ』を読んでその一端に触れることができた。自分の著作の中でもこの点について書かせて頂いている。

第一次計画移民 269 人は、約 4,000 人の応募者の中から大変な難関を経て選ばれた。土壌が肥沃で将来性のある場所に、各世帯 50 ヘクタールの土地が無償で与えられというふれこみは、募集にありがちなやや誇張した表現もあったろうし、移住地に着いて後に「聞いていた話とは違う」「口車に乗せられた」と感じた移住者も少なからずあったろう。というのは現実にはまったく人跡未踏のジャングルそのものだったからである。それでも、移民者たちは抱いてきた大きな夢と、不屈の開拓者精神で、原始林に立ち向かっていった。

そのように移住したボリビアから、1990 年代以降、逆に神奈川の地に移住してきた方々を取材していて感じるのは、当時のボリビアで沖縄県系人の多くが、直面した過酷な現実には悲嘆落胆するよりも、むしろ新天地で豪放磊落な生活ぶりを実践していたことである。何もない原生林ということは、逆に言うとそれだけ手つかずの自然の中で、野生動物や摂取可能な植物が周りに溢れていることでもある。女性でも子供でも銃を扱うのは当たり前で、山野に出かけ野生動物を獲って食料にしたという。狩りの対象となった野生動物がライオン(ピューマのことか?)、5-6 メートルはあろうかという大蛇ボア、ヒョウ、ワニ、大アリクイ、アルマジロと聞いて”思わずえっ・・・”と唸った。なかでもアルマジロが一番美味しかったとかで、何とも豪快な話でワクワクする。少し遠かったとはいえリオグランデ川まで行けばナマズ、ドラード、ピラニアなど釣りの対象となる魚は豊富だから、食料確保のための釣りには向いた場所であったに違いない。狩りや釣りの上手な人は、家族だけでは食べきれないほど獲って、コロニー内のご近所に配るのが普通だったという。「ジャングルの中で生活するというの言うなれば無の世界だか

ら、お金とか地位とかそんなのは関係ないんですよ。生き延びることが一番で、生きていればなんでもできる。学校では学べない貴重な体験でした。」と語る方に何人も出合った。

ボリビアの周年史を読むなかで、開拓時代の苦闘を語る象徴的な道具としてマチェーテ(斧)とアーチャ(鉞)という言葉に出合った。1954年ボリビア入植時には、開墾に使える機械や動力源は全くなかったため、昼なお薄暗い原生林に一家総出で分け入り巨木を切り倒すのに、頼りはマチェーテとアーチャだけだったという。砲弾こそ飛んでこないけれども、これは一種の戦争だったと述懐する移住者もおられた。自動車が手に入る前は、唯一の交通手段として馬をよく使用したという。

ヌエバ・エスペランサとはコロニーにある日本語学校の名称であるが、初期の県系移住者たちは文字通り「新しい希望」に向かって不屈の開拓者精神で原始林を切り開き、その後60年余を経て、大きく発展した現在のコロニア・オキナワに繋がっている。そこでは今は日本の沖縄でも聴かれることの少なくなった流暢な琉球語が飛び交い、歌あり踊りあり、三線の音色も聞こえ、まさに「沖縄」そのものの痛快でユニークな世界がそこにある。



写真 3-1 ワールドウチナンチュ大会 (2016年)

2016年10月に沖縄・那覇市で世界ウチナンチュ大会が開催された。海外・国内から約6000人を超えるウチナンチュや、沖縄に関心のあるヤマトンチュも参加し、国際通りを埋め尽くして

盛大なパレードが繰り広げられた。とりわけ南米からの参加者が多く、沿道からの「おかえりなさい!」「メンソーレ」の掛け声に目頭を熱くする参加者も多かった。そして大会最後の閉会式で世界中から里帰りした移住者へ贈られた言葉は、バイバイではなく「いってらっしゃい!」であった。

#### 4. じゃがいもの旅の物語(連載その20)

旅行作家

杉田 房子

インカの男女の惑乱は、ヒスパニオラ(編者注:現在、ドミニカ共和国とハイチ共和国が在るエスパニョーラ島の英語読み)からいよいよスペインへ向けて船が出帆した後も、しばらく続いた。

第一に、船の数が多い。両手の指を全部使ってもやっと数えられるほどの多くの帆船が、きっちり列を作ってカリブ海を渡っている。筏しかないインカではもちろん、カヌーの小舟があるパナマやカルタヘナでも考えられないくらい壮観だった。

第二に、自分たちそっくりのインディオと、目を疑ったほどびっくりした黒い肌の人間とが大勢乗り込んで、スペイン人の指図どおりに働いている。肌色、顔形、言葉、全て異なる人間と一緒に動きまわる姿は、夢を見ているとしか思えない。

スペイン国王は本国ではカジス港を基地として、新世界ではヒスパニオラを基地として、船隊を往復させていた。船便も船荷も増え過ぎた1548年以後は、カジスのほかにセビリヤ港も基地にし、新世界でも船隊を二つに分けてヒスパニオラ経由でメキシコのベラ・クルース、コロンビアのカルタヘナで積荷をさせることにしたが、いずれにしてもヒスパニオラは新世界の中心で、1549年には百一隻もの船をスペインに送り出している。当然、人手は足りなくなるから、インディオはもちろん黒人も使った。それに、スペイン人の船乗りとは違って給金もいらぬし、食物も粗末で済むから、船の持主はむしろ争って使う。肌色が白くなくて、言葉がスペイン語でない人間が一人でも多ければ、儲けの黄金は一袋多くなるのだった。

勿論、宝の山のようなこうした船は、海賊にねられる。1522年、フランス王に仕えていたベラチアーノがスペイン船三隻を捕獲したのを手はじめに、1628年にはオランダのヘインはスペイン船隊を丸ごと手中にした。ヘインの戦利品は銀177,357ポンド、金135ポンド、皮37,357枚、砂糖235箱――。首になったスペインの海軍大臣はアフリカの流刑植民地で生涯を終えた。新世界を雄飛したコロンブスの海は、黄金をめぐる争闘の海と変じたのである。

船艙にひっそりと寄り添い、ひっそりと焼きじゃがいもを食べて暮らしていたその時のインカの男女は、あるいは幸せであったのかもしれない。インカ帝国を征服したピサロ総督は、ありのままのインカの男女をスペイン国王の目に触れさせようとしていた。首だけ開けた大きな布をすっぽりと上衣に着た男たち。刺繍の帯で長い腰布を締めた女たち。そして、パパミククのじゃがいも食いの食生活。アンデスで暮らしていた時とどれ一つとして変わらない姿で、スペイン国王へとどけなければならぬ、と総督は厳命していた。

けれど、インカの男女のひっそりとした暮らしも、もう長くはつづかなかった。コロンブスが初航海で東から西へ二か月かけた海を今は西から東へ一か月そこそこで渡る。ある夜、上甲板はにわか騒がしくなった。

「おお、聖エルモの火だぞ」

帆柱の先に火の玉が舞っている。大気中にみなぎる静電気が、高いところや尖ったところで散らす火花を、航海の守護聖者である聖エラスムスに因んで、船乗りは聖エルモの火と呼んでいた。この火が見えれば海岸が近く、航海も終わりと信じている。実際、船はそれから数日で陸影を見た。それはカナリア諸島だった。この島を最後にコロンブスは未知の初航海に向かったし、新天地に植えられた砂糖キビもここから渡ったのだ。

ヨーロッパは、インカの男女とじゃがいもを乗せた船の、もう目前にあった――。

「異教徒だから、ああいうものも食べられるのだ」

じゃがいもを食べているインカの男女を見て、村の男がむっつりといった。がやがや話していた女たちは、とたんに静かになる。

イスラム教徒に780年間も支配され、キリスト教徒が結束して悪戦苦闘の末に国土を回復したスペインでは、異教徒という言葉は悪夢のようなものだった。悪戦苦闘の間に、同じキリスト教を信じる者がカソリックとプロテスタント、旧教徒と新教徒に分かれ、ヨーロッパ全土で争っていた。異教とか異端とか聞けば、誰でも問答無用に黙ってしまう。

「たしかに聖書にも出てこない食べ物だ」

静けさを破ったのは、インカの男女や財宝を送りとどける馬車の列を護衛してきた兵士だった。

「だがな、ペルーやインカも聖書にはでていない。そこに行った俺たち兵士の仲間は、ほかに食い物がないから食べたのだぞ。では、俺たちの仲間は異教徒か」

甲冑姿はいかめしいが、兵士はアンダルシアの沃野が作る葡萄酒に酔っていた。

ペルーやインカに行けば、黄金郷のエル・ドラドで一稼ぎできるのに、馬車の護衛で野道をいくうだつの上がない役目にうんざりしていたのだろう。酔った口調が、不満でとげとげしい。村の男は、おどおどした。

「国王陛下の王宮では、あのコロンブス殿が持ってきたパタタを、王宮の庭に植えたということだ。セビリヤでも植えている。なにごと物も試してみなければな」

兵士の話は、馬車の列が出発して、インカの男女の姿がはるかに霞むシエラ・モレナの山裾に溶け入ってしまったから、アンダルシアの平原のあちこちで囁かれつづけた。

「パタタは生だけでなく、乾燥しても食べられるってさ」

「石みたいに固く干せば、永遠の食物というくらい保つそうだよ」

「黄金郷のエル・ドラドも結構だけど、金銀を手に入れるのは王様やお偉方だけ。パタタが本当に食べられて長保ちするなら、それぐらいは私たちがいただきたいね。」

なかでも、女たちの話は遠慮がない。季節になれば麦の穂が一面にそよぎ、オリーブやオレンジが実り、葡萄からは芳醇な酒も醸せるアンダルシア地方は、スペインはもちろんヨーロッパ全土でも指折りに豊かな土地だが、それもお天気次第だった。収穫が減っても、国王は税を取り、領主や地主は年貢を集める。助けてくれるのは、昔もいまも太陽に大地だけという生活に変わりはないし、暮らしにあえぐのは女たちだった。

「誰か、パタタの種を手に入れられないかね」

じゃがいもも、種から育てるものとばかり思っていた女たちは、じれったそうに足踏みした。インカの男女が眺めて「木の箱みたい」だと思った粗末な木靴が、重たげに土に鳴った。

「そういえば、インカからきたあの連中だって革の靴を履いていたよ」

村の女たちは、いまいましげに不恰好で重い木靴の足元を眺めあつたが、セビリヤの町外れでは、もっと大きくて不格好な木靴を履いた足が一步動くごとに、じゃがいもが一つずつ土の中に埋められていた。

「ヒジから手首まで、ちょうど前腕の長さくらい間をあけて埋めるのだ。パタタはその間の土の中にいっぱい実るのだから」

僧服の男が、木靴を履いた作男を指図していた。インカの男女とともにアンデスの山地からパナマ地峡に戻った神父は、仕分けしたじゃがいもとともに知る限りのことを書いて、スペインへ帰る輸送隊にいつけていたが、酔った兵士が王宮の庭でもセビリヤでも植えていると聞いていたくらいだから、かなりの知識を持つ人がすでにいたかもしれない。指図は、畝土を盛り上げさせたり、きまった深さで穴を掘らせたり、こまごまとしている。

作男は、のろのろとぎこちなく働く。しかし、それは愚鈍だからでも怠惰なためでもなかった。

「牛の歩みは遅いというが、農夫の進歩に比べれば風のように速い。一年一作の畑を二作にするのに、幾年かかったことか。一つの畑でいろいろな作物を次々と作る輪作も、畑がやせるといって嫌がったものだ」

作男のぎこちなさは、じゃがいもの栽培という新しいことを、懸命に覚え込もうとしている姿なのだ、と思いながら僧服の男は眺めていた。

実際。作物も畑も人手も集中して、効率よく多くの収穫を得ようという農法も、たった70キロしかへだたっていないアラス地方からバレンシア地方までひろまるのに、30年かかっている。女の足で歩いて、三日そこそこのところを30年がかり。それが、農夫の進歩というものなのだ-----。

そのころの僧院は、知識から生産まで、大きな役割を果たしていた。コロンブスの航海計画を励ましたパロスの僧院長ファン・ペレス・デ・マルチーナは王室の財政顧問で、天文学者でもあった。作男にじゃがいもを植えさせたセビリヤの僧院は、葡萄酒の壘にはコルクの栓がいいのを発見し、インカの男女がつれていかれたはずの王都のバリヤドリーでは、金細工の技術を僧院が進歩させた。

「パタタは種からつくるんじゃない。パタタはパタタから増やしていくのだ。」

じゃがいも植えを終えた夕べ、作男は近所の農民にしゃべりまくった。

「パタタ一つから10個、20個のパタタができるんだぞ」

麦でも、蒔いた種の四、五倍の収穫がせいぜいだったのに満足していた農民は、目が覚めたような顔で聞いていた。

セビリヤのラ・・サングレ病院の会計簿には、じゃがいもが1576年から登場している。初めは、一ポンド単位だった買い入れが、1584年以降は25ポンド単位を意味するアローバで記入されるようになった。八年間に、少なくとも25

倍のじゃがいもが、セビリヤでは作られていたのだった。

インカの男女と財宝を乗せた馬車の護衛兵がいったことは、正しかった。確かにアンデス山地のじゃがいもはパタタとしてセビリヤに根づいていた。

しかし、兵士のいうコロンブス殿のパタタが、本当に王宮の庭に根づいたかどうか、或いはそれがパタタではなくてサツマイモのパタタではなかったのかどうか、はっきりとしたことはわからない。第一、コロンブス殿にしてさえ、新世界で初めてじゃがいもにお目にかかった時には、ほかのイモと混同していた。第一回の航海で、土地のインディオが、アヘスとかニアメスとかニアヘスとかいうものをすべてパタタと呼んだ、と航海記を整理したラス・カサス神父はいつているが、そのうちのあるものはサツマイモかヤムイモだった。

「形はニンジンで、栗のような味がする」と航海記がいうのは、薄紫色の皮のサツマイモであったかもしれない。

「大根のような根を、パンのように食べる」というのは、皮をそげば白いヤムイモであったのだろうか。

それに、王宮といっても、コロンブスの航海前後のスペインは、イサベル女王とその夫フェルナンド王の両王統治の時代で、コルドバからサラマンカ、マラガからサラゴサ、ムルシアからバリヤドリーと王宮が転々とした。そのどこにパタタのじゃがいもが植えられたのか、あるいはパタタといわれ、あるいはバタタと呼ばれる名前同様に、まぎらわしい話しか伝わっていない。

はっきりしているのは、セビリヤのラ・サングレ病院の台所で、1576年には、じゃがいもが料理されていたということだし、植え付けと試食の期間を考えれば、その数年前からアンダルシアの沃野にじゃがいもは根づいていたということだろう。

アンデス山地をを征服したピサロ総督が、インカ帝国第13代のアタワルパを処刑したのは1533年だったから、新大陸の土を離れたじゃがいもは、

40年そこそこの間に、大平洋を北上し、パナマの地峡を越え、カリブ海の島々を経て大西洋を乗りきり、旧大陸ヨーロッパの土に移り育ったことになる。

一緒にヨーロッパの土を踏んだインカの男女は、王都バリヤドリーをめざして、馬車に積んだ金銀や護衛兵とシエラ・モレナの山裾を分け入っていたが、セビリヤからコルドバへ、グアダルキビル河畔からシエラ・モレナ山稜へ、アンダルシアから平原一帯にゆっくりとひろまっていったじゃがいもは、パパスのじゃがいもが主食でパパミククと呼ばれたインカの男女の後を、追い慕っているかのようにだった。(続く)



写真 4-1 杉田房子著

『じゃがいもの旅の物語』(1996年) 人間★社  
大航海時代を駆けた、もう一人の主人公(表紙)

## ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9  
100ños de historia de  
la inmigración japonesa en Bolivia  
2を原典として2012年までを追補  
在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3  
日本人ボリビア移住100周年誌  
在庫1冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12  
コニア・村入植50周年記念誌  
2017・10 在庫予定
- ④ 『拓け行く友好の懸け橋』 2005-12  
サンファン日本人移住地入植50周年  
記念誌 在庫1冊
- ⑤ 『ともに 50年そして未来へ』  
2006-12  
サンタクルス中央日本人会50周年記念誌  
在庫1冊
- ⑥ 『ラパス日本人会90年の記録  
1922-2012』 2012-10,  
2017-10 在庫予定
- ⑦ 『ギェンターの冬』 2016・7  
パラグアイのストロイスル独裁政権時代を  
描いた異色のミステリー政治小説  
在庫多数

### 統一価格①—⑦共 2500円(税・送料込)

ご注文は当協会まで、下記へメール又は  
電話で、お名前、ご住所、電話番号、  
書籍名、冊数をご連絡ください。

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133

御支払は銀行振込でお願い致します。(口  
座番号、名義人は発送時に連絡します)

## 前号以降の主な出来事と今後の予定

- 3/23 ボリビア多民族国・海の日
- 3/30 2016年度第2回理事会
- 4/24 ボリビア多民族国・大地の日
- 5/26 2017年度第1回理事会・定時総会
- 5/30 主たる事務所移転登記
- 6/3-4 LA学会・ボリビア関係書籍頒布
- 7/2 川崎国際交流祭(中原区)
- 7/13-9/3 島根石見銀山展・出雲市太田市  
(特別協力/ボリビア中央銀行)
- 8/3 ボリビア多民族国独立記念日  
祝賀パーティ
- 8/11 森の音楽祭(津市美杉)
- 8/13 ボリビアフェスティバル2017(隅田公園)
- 9/16 サンファン移住地の集い(八王子市)
- 12月上旬 クリスマスイベント

## 編集後記

会報29号をお届けします。今回は、ジェンダー問題に詳しいラテンアメリカ現代史研究者、現代アンデス先住民の外敵との闘いを描いたボリビア映画の日本への紹介者、日本国内の沖縄県出身移住者、および旅行作家によるインカ帝国から世界へ広まったじゃがいもの旅の物語、について、4人の方々に、寄稿を頂きました。執筆者の皆様へ厚く感謝致します。会員の皆様には、読後のご感想などお寄せ頂けると幸いです。

編集委員：白川光徳 細萱恵子 杉浦 篤